

〔安齋隨筆前編〕韭，俗に韭をニラといふは誤也。本名ミラ也。和名抄に雍和名於保美良韭和名古美良とあり、大みら小みら也。日本紀神武天皇御歌にも瀬羅ラとあり。

〔物類稱呼三生植〕韭にら 上總にてふたもじと云是は葱をひとつもじと呼故に、にらをふたもじと云、

〔倭訓栞爾編十九〕にら 俗に韭をいふ、みらの轉せる也。上總の國俗はふたもじといふとぞ、きをひともじといふに對へたる名也。やまにらは山韭也。又水韭あり。

〔倭訓栞美後編十六〕みら 倭名抄に雍をおほみら、韭をこみらと訓せり。今は韭をにらといへり。新撰字鏡には、雍をなめみらと、韭をたゞみらとよめり。又葱もみらとよめり。萬葉集にく、みらとよめるは、莖韭の義也といへり。

〔古事記中武〕然後將擊登美毘古之時、歌曰、美都美都斯久米能古良賀、阿波布爾波、賀美良比登母登、曾泥賀母登、曾泥米都那藝氏宇知氏志夜麻牟、

〔古事記傳十九〕賀美良比登母登、美良は韭なり。和名抄には、雍、和名於保美良、韭和名古美良と見え字鏡には、雍奈女彌良、韭太々彌良、また葱韭彌良と見ゆ。万葉十四丁十八に、久君美良ともよめり。莖韭なさて賀美良と云は物に見えず、別に一種か、又たゞの韭にて臭韭と云るにても有べし。越前國敦賀郡鹿蒜も臭蒜の意の地名歟。式には加比留神社とあり。書紀釋には、謂大韭と云は賀は、か青か黒などの加にて、助語歟と云れども、さも聞えず、又延佳美良後には爾良と云り。

〔本朝食鑑三辛〕韭古訓仁美良、

集解、韭者家家種之、滋養而食、然爲五辛之一、而不妄食、亦宜煮食、不宜生食、或燒而煮食亦宜、凡韭叢生、豐本長葉、形似胡葱、而葉平扁、中實不圓、有劔脊、色深青翠、根白、可以根分、可以子種、一歲不過五剪、收子者一剪、或不可剪、剪後用冷灰培根、則再葉易生、八月開花成叢、九月收子、其子黑色而扁、風處可